

説教者の確信

レーマン, G. D.

序 文

ここで筆者が取り上げる説教や説教者に関する小論は、実践的な意図をもつて論じられている。この小論が牧師職理解の助けになればと願っている。ここには実践神学に対する筆者の考えが反映されている。すなわち実践神学の根拠は聖書と牧師の務めをいかに神学的に理解するかにかかっており、同時に実践神学の究極の意味は神学の諸分野で行なわれているキリストの体なる教会の伝道と生活の神学的研究成果を統合することであると考えている。特に、この小論の関心は説教者そのものである。将来の説教者をめざす学生たちからしばしば聞かされるのはみ言葉を語ることの自信のなさである。筆者の答えはいつも同じである。「自信がなくても結構だ。大事なのは確信だ」と。今回特に取り上げたいのはその「確信の根拠」である。

この論文は著名な英語圏の説教者 John R. W. Stott (ジョン・R・W・ストット) 博士に負うところが多い。特に Stott 博士の説教に関する書物 *Between Two Worlds* から多くの示唆を得た。説教の作成や実践における技巧や技術の重要性を決して軽んじることはない。しかし、今回の課題は説教の実践を支える確信そのものである。多様性が強調される今日、またヒューマニズムを焦点としている多くの説教者に囲まれる状況の中で、我々が普遍的な公の真理を語る確信があるかどうかが問われているように思う。我々はそれを宣べ伝える勇気を持っているだろうか。

1. 神に関する確信

いかなる神を信じているかということと、いかなる説教をするかということは不可分である。我々の神論、つまり、神の存在、行動、目的について信じている事柄は決定的である。説教者として忘れてはならないのは神の属性である。

まず、第一に、神は光である。Iヨハネ1:5、「わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです」。聖書における光の象徴には様々な意味があるが、ヨハネにおいては光が真理を表すことが多い。イエスは自らを「世の光」であると主張した。神は自らを啓示することを喜びとする。輝くことは光の性質であり、自らを啓示することは神の性質である。このことは説教者の慰めである。説教する時、目の前にいる多くの聴衆はそれぞれの闇をかかえている。神から離れているもの、人生の困難に直面しているもの、疑問や不信仰に満ちているもの、あるいは不安で取り乱しているものがいる。我々の説教において神ご自身がご自分の光を彼らの闇の中に照らし給うという確信が必要である。パウロの言葉で言えば（IIコリント4:5-6）、「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました」。

第二に、神は行動された。行動されることによって、ご自身をあらわされた。創造の行為によってのみならず、贖罪の行為によってご自身を啓示されている。

旧約聖書はアブラハムの召命と出エジプト、バビロン捕囚からの帰還という三つの解放の実例とそこから生じた契約関係に焦点を合わせている。

新約聖書ではIIコリントとヘブライ書に語られている「新しい」、「まさった」、また「永遠の」契約と今ひとつの贖罪に焦点を合わせている。この贖罪はイエス・キリストの誕生、地上生活、十字架上の死、そして復活によって確保された神の最高の行為である。聖書の神は解放の行為をなさる神である。

第三に、神は語った。神は言語をとおして、現実にその民とコミュニケーションを取っておられる。旧約聖書の預言者は度々「主の言葉」が臨んだという。靈である生ける神には文字どおりの口はない。しかし、預言者は「主の口がこう宣言される」と言い切ることが出来た（イザヤ 40:5）。勿論、神の語る言葉と神の行為は結合している。神がご自分がなそうとしておられる行為を説明するのは興味深いことである。神はアブラハムをウルから呼び出し、その召命の意味を教え、彼と契約を結んだ。後には、イスラエルをエジプトの奴隸状態から呼び出し、なぜ解放したか、その理由をモーセをとおして教えられた。すなわちアブラハム、イサク、ヤコブへの約束を果たされたことと、律法を与えて正しい礼拝を教えられたことである。さらに神はイスラエルを捕囚の辱めから救い出し、預言者をとおして、なぜ裁きを受けたか、回復にはどんな条件が伴うのか、また神の民にどのような生き様が要求されているかを教えられた。最後に、神は御子を人間として、地上で生活し、また仕え、命を捧げ、よみがえられされ、そして御靈を与えるために地上に送られた。この神の業を見、神の言葉を聞き、最初の目撃者体験の証人として神は使徒を選び、訓練されたのである。したがって、神の自己啓示は神の行為とそれを説明する言葉の両方によるものであって、この二つは不可分である。神の啓示の頂点である肉体となったみ言葉は、彼が何者であるかを行為をもって表現したのみならず、言葉をもって語っているのである。使徒たちは証人として主イエス・キリストのことを述べただけではなく、その解釈もしたのである。

神が語られているからこそ我々も語れる。我々には神が光であってご自分を知らせたいと願い、自らを知らせるために行行為し給うこと、また神がその行為の意味を語り給うたことに確信がもてれば、我々は沈黙できず、語らざるを得ない。預言者アモスが述べたとおりである。「主なる神が語られる、誰が預言せずにいられようか」（アモス 3:8）。

2. 聖書に関する確信

我々の聖書論は我々の説教の決定的要素である。聖書に関して三つの点を指

摘要しておきたい。まず、第一に、聖書は書かれた神のみ言葉である。これまで述べてきたように、我々の神は歴史的な贖罪の行為、そして究極的に史的イエス・キリストをとおして自らを啓示された。また、預言者をとおし、イエス・キリストの人格と使徒たちの証言および解釈において語られた。また、神の行為を記録し、その意味を解き明かす神のみ言葉が書き残されていると信じている。この第三段階無しには、イスラエルにおいて、またイエス・キリストをとおしてなされたこと、語られたことは時代と民族を超えてすべての人に届く普遍的なものにならなかつたであろう。したがつて、神の御計画においては、この行為と語られた言葉と書かれた言葉は一つである。御靈の靈感の奥義によつて、聖書は同時に神のみ言葉と人間の言葉である。故に聖書が、書かれた神のみ言葉であると言われる時、それは人間の口によつて語られ、人間の手によつて書かれた、人間をとおしての神のみ言葉である。それでは、この聖書論は我々の説教にとってどのような意味を持っているかを考察したい。

まず言えることは、教会の伝道にとってその意義は明白である。イエス・キリストによる神の究極の行為とみ言葉はすべての時代のすべての人のためのものである。信頼に値する記録が書かれ、保存され、2000年が経つても、その行為とみ言葉は我々に伝わつてゐる。現在の我々はイエス・キリストを知ることができる。しかし、それは聖書をとおしてのみであり、また聖靈による証言によつてである。

ここで我々の説教者としての責任が明らかになる。イエス・キリストの主観的、現代的な証しがないわけではないが、それは現代の説教者の第一義的な務めではない。我々の第一の務めは1世紀の目撃者の使徒たちによる神の権威あるイエス・キリストの証言を忠実に現代人に伝えることである。聖書にこそ神の贖罪行為の神ご自身による解釈が与えられている。言うまでもなく、聖書は1世紀のキリスト教共同体の文脈の中で書かれたものである。その共同体は伝承を保存しただけではなく、伝道や教育や礼拝の必要に合わせて形成した面もあった。なお、聖書の著者には神学的視点や目的もあったことは分かっている。にもかかわらず、イエス・キリストご自身は彼らの権威の根拠であった。新約

聖書の正典が定められた時には、以前にローマ・カトリック教会で教えていたのと違って、教会の権威がその根拠ではなかった。むしろ、使徒たちの教えることを根拠に、その権威が認められた。聖書を手に取る時、我々は生ける神のみ言葉と関わっているのである。我々の説教は「人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、『靈』に教えられた言葉によっています」(1コリント2:13)。我々の説教の根拠は聖書の権威にあると確言できる。

第二には、以前に語られた言葉、聖書をとおして神は今日なお語っておられることを我々は確信する。聖書は神の言葉が保存されている古代の資料の蒐集物ではない。生ける神から送られた生けるみ言葉であり、現代世界に向けられた現代のための使信である。

このことは使徒たちの旧約聖書引用文からもうかがえる。彼らが旧約聖書を引用するときいつも γέγραπται γάρ (ゲグラプタイ ガル)、または、λέγει γάρ (レゲイ ガル) という二つのギリシア語のどちらかからはじめている、つまりここで二つの対照が見られる。完了時制(過去の出来事)、と現在継続時制(現在の行動)、そして、書かれた言葉と話された言葉の対照である。いずれも、神が語られたことであるが、一方は永久不変の書かれた記録、もう一方は神が以前に語られたが今なお継続的に語られている言葉を指している。この現代の神の声の概念はヘブライ書3章と4章において強調されている。ヘブライ3:7では、「聖靈がこう言われるとおりです」と言った上で詩編95篇から引用する。「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、心をかたくなにしてはならない」と。さらに、この原則は新約聖書にも適用されていることはヨハネ黙示録2章と3章で確認できる。ここではアジアの教会に宛てられた七つの手紙みんなが同じ言葉で締めくくられている。「耳あるものは、『靈』が諸教会に告げることを聞くがよい」。言い換えれば、ヨハネがパトモスから書いて送った諸教会宛の手紙の源は聖靈であり、その聖靈が継続的に聞こうとするものに生きた声で語り続けているのである。

神は今なお過去に語られた言葉をとおして語り続けていることを理解することは二つの過ちから我々を守ってくれる。一つは、神は過去に語ったが今は沈

黙しているという理解。もう一つは、神は現代においても語り続けているが、現代の神の声は聖書とは特に関係がないという理解。前者の理解に従えば、キリスト教は時代遅れの宗教であると片付けられるであろう。後者に従えば、教会が現代社会問題の虜になってしまふ。両方とも間違いである。神は語ったし、語り続けている。この二つは不可分である。神は語った言葉をとおして語り続けている。したがつて、カルヴァンが強調したように、み言葉とみ靈は不可分である。

第三に、神のみ言葉は力に満ちていることに注目したい。神は語っただけではない。神は語り続けているだけでもない。神が語るときは行動がともなう。イザヤ 55:11、「わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」。我々の時代には、言葉や説教に対する自信喪失が目立つ。使徒言行録によれば一つの説教で三千人が回心したが、我々の時代には三千回の説教で一人が回心すると聞いた。確かに、我々の言葉は無力のようを感じられる。我我には、神のみ言葉が力に満ちていることを再確認する必要がある。神はみ言葉によってこの宇宙を創造された。詩編 33:9、「主が仰せになると、そのように成り、主が命じられると、そのように立つ」。そして、今は同じ権威あるみ言葉によって主が再創造し、救うのである。ローマ 1:16、「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じるものすべてに救いをもたらす神の力だからです」。I コリント 1:21、「神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです」。I テサロニケ 2:13、「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから、神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているのです」。

聖書の中では多くの譬えによって神のみ言葉のもつ大きな影響力を描いている。ヘブライ 4:12、「神の言葉は生きており、力を發揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と靈、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや

考えを見分けることができるからです」。詩編 119:105, 「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」。また、み言葉は有りのままの自分やなるべき自分を見せる鏡、命を誕生させる種、栄養を与えて成長させる牛乳、栄養や力を与える麦、甘くする蜂蜜などに譬えられている。我々が説教壇に上るとき、それは力あるみ言葉を手と心と口に持っているのであり、その力を期待して講壇に上るべきなのである。

3. 教会に関する確信

教会に関して強調したいことは、教会は神がみ言葉によって創造されたものであることである。教会はみ言葉によって創られたのみならず、同じみ言葉によって裁かれ、支えられ、導かれ、聖化させられ、改革され、新しくされ、勇気付けられ、派遣されるのである。過去において、ローマ・カトリック教会は教会が聖書を創ったとし、聖書よりも教会の権威が上であるように振舞った。聖書が形作られる環境と聖書自体を切り離すことができないことは確かであるが、単純に教会が聖書を創ったと言えないのであって、むしろ、神のみ言葉が教会を創ったし、今なお創っているといった方が本當である。アブラハムの召命によって神の民が誕生した。そして、ペンテコステにおける使徒たちの説教をとおし聖霊の力によってキリスト教会が生まれた。今も同じである。伝道者の召命と使徒たちから伝わっている福音の説教によって聖霊が教会を形成するのである。

また、聖書は神の民が神のみ言葉に依存していることを明確に示している。聖書は一貫して神がその民に語りかけ、歩むべき道を教え、神の言葉に聞き従うようにと訴え続ける。旧約聖書には聞くようにとの勧告が多くある。神のアダム、アブラハムとの関わり、またモーセ、士師、王、預言者をとおしてのイスラエルとの関わりから理解できることは神の民の幸福は神の声に聞くこと、神の約束を信じること、神の戒めに従うことが条件になっていることである。

新約聖書においては、神の使者は預言者ではなく、使徒である。しかし、状況は同じである。彼らも神のみ言葉の担い手であることを主張する。キリスト

から任命を受けて、キリストの権威が委ねられ、その名によって大胆に語る。そして、諸教会が聞き、信じ、従うことを期待する。使徒たちの著作をとおして、キリストが教会を教え、勧告し、とがめ、また励ます。約束も忠告も与え、また聞くように、信じるように、従うように、忍耐するようにと訴える。神の民の健やかさは神のみ言葉に対する注意深さにかかっているとされているのである。

現代の説教者である我々は預言者でも、使徒でもない。我々には新しい、直接的な啓示が与えられないからである。彼らと同じような仕方で神のみ言葉が我々に与えられるわけではない。我々はみ言葉に赴かねばならない。召命を果たすことも、教会の将来もその一点にかかっているのである。我々はみ言葉に赴かねばならない。語るべき使信をみ言葉に求めなければならないのである。我々が預言者でも使徒でもないとしても、忠実にみ言葉を講解するなら、手にあるもの、口にするものは神のみ言葉であり、聖霊がそれを信じるものの中で生きた力強いみ言葉にしてくださるのである。神がその民を活気づけ、養い、激励し、また導くのはみ言葉によってである故に我々説教者の責任は重大である。

教会の健やかな存続のためには説教と聖礼典の関係も大切である。アウグスチヌスは聖礼典のことを *verba visibilia*、目に見える言葉と語った。確かに、み言葉と聖礼典両方ともがキリストを証ししている。両方ともがキリストによる救いを約束し、信仰に活気を与え、信仰を養う。一方のメッセージは目に向けられ、もう一方は耳に向けられている。しかし、聖礼典はその解釈のためにみ言葉を必要としている。神の約束がみ言葉によって宣べ伝えられ、聖礼典によってドラマとして表現される。両方ともが神の恵みの手段である。しかし、み言葉は欠かせないものである。なぜなら、み言葉なしには聖礼典の意味は不明確のままだからである。

現代の教会の活性化には、忠実な、力強い、聖書的説教がその絶対的前提条件である。詩編の詩人の言葉を借りて言えば、神は今なお教会に語っておられる、「今日こそ、主の声に聞き従わなければならない」（95:7）。

4. 牧会に関する確信

牧会は何よりもみ言葉による務めである。聖書における牧会者の職務の根柢は明瞭である。旧約聖書においては神を羊飼いとする比喩的表現が目立つ。詩編 23:1-3, 「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」。主イエスはこの隠喩をご自身に適用した。ヨハネ 10:9, 11, イエスはご自身の羊に「門を出入りして牧草を見つける」と約束された。そして言われた、「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」。良い羊飼いは委ねられているものを愛し、見守り、養い、また保護する。しかしながら、復活後には、ペトロにあの印象深い言葉が繰り返される。「わたしの小羊を飼いなさい」、「わたしの羊の世話をしなさい」、「わたしの羊を飼いなさい」と言って、この役割を継続するようにと委任した（ヨハネ 21:15-17）。使徒たちはこの戒めを決して忘れなかつた。I ペトロ 5:2 でも、教会の指導者たちに「あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい」と言つてゐる。また、使徒言行録 20:28 ではパウロが、「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖靈は、神が御子の血によって御自分のものとなさつた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさつたのです」と訴えている。言うまでもなく、神の群れを養うとは教会を教えるという意味の隠喩である。故に牧師は本質的に教師である。キリストによって教会に与えられた賜物の一つとして、エフェソ 4:11 は牧者、教師を指し示している。この証義からすればこの二つ、牧者、教師は一つの務め、一つの職務である。このテキストを解釈して、カルヴァンは言つる。「神が——一瞬にしてその民らを完成にいたらしめる力を、持ちたもうたにもかかわらず——ただ教会の教育のもとにおいてのみ、（少しずつ、少しずつ）かれらを育て上げて、成人の段階にまで達せしめること以外を、欲しておられないのを、ここでわれわれは見るのである。われわれは、また、その実施される方法をも見る。すなわち、天上の教理を説教するつとめが牧師たちに課せられることによってである」（『綱要』IV, 1, 5）。また他のところでカルヴァンが言つる、「地上の教会を保つために、使徒

と牧師の職務が必要なのとくらべれば、現世の生を養い支えるための太陽の光や熱も、食べ物や飲みものも、それほどには不可欠といえないからである」(『綱要』IV, 3, 2)。

サムエル・ヴォルベダ博士が、『説教の牧会的天才』という書物で語るように良い羊飼いの羊に対する配慮は四つから成る。食べさせること（栄養を与えるため）、導くこと（羊は迷い易いから）、見張りをすること（狼から守るため）、そして癒すこと（傷ついたものの手当）である。この四つの行為はみなみ言葉の務めの諸要素を言い表している。牧会には他にも多くの側面はあるが、み言葉の牧会的説教が会衆のニードに多く答えることができる。教会の健全さ、育成、また成長は何よりも牧師の説教にかかっているのである。

5. 説教に関する確信

説教の型を分類する試みが今まで多くあった。ある人は単純に説教を主題説教と講解説教に分類する。しかし、英語圏では *biblical, textual, ethical, devotional, social, doctrinal, evangelistic, narrative, biographical, first-person, apologetic, prophetic* などのように、数多くの部類に分ける人もいる。説教の型は多くあるとしても、我々は講解説教を多くの説教型の中の一つに過ぎないものとは認めがたい。教会の説教はすべて聖書の説教で本来講解説教ではあるまいか？勿論、それは講解説教の定義にもよるであろう。長い聖書のテキストを一節ずつ解説していけば講解説教になるというわけではない。講解説教の定義をもっと幅広い意味で捉えるべきであろう。講解説教とは特定の型を指すのではなく、聖書の真理としての説教の内容を指し示す。聖書を講解することはそのテキストにあるもの、その使信を引き出して、見えるように明らかにすることである。講解するとは閉じられているものを開くこと、不明瞭なものを明瞭にすることである。*exegesis* の反対は *eisegesis* である。すなわちテキストにないものを負わせ、読み込むことである。講解説教では、使信がテキストから与えられる。残念ながら、多くの説教者は自分の言いたいことを言って、それにテキストを付け加える罪を犯している。講解説教の場合、テキストから出発して、そのテキ

ストからの使信を見出すことが中心である。

しかし、講解説教においては、聖書のテキストの長さは問題ではない。一つの表現、一節、一段落、一章、一書卷、あるいは言葉一つでも可能である。大切なのはテキストの扱いである。聖書のテキストの長さがどうであれ、講解説教者の務めはテキスト自らが本来の使信をはっきりと、明らかに、正確に、適切に、付け加えることなく、減じることなく、ごまかすこともなく語れるように、そのテキストに聞くことである。講解説教では、聖書のテキストが説教の内容を決定する。講解説教には幾つかのメリットがある。

(a) 講解は説教者を制約する。

聖書の説教として、自ずから説教者の使信はテキストの使信に限定される。世俗文学や何かの宗教書の一部を解説することと違うし、語り手の意見を述べることとも違う。どこまでもテキストの講解者であることを認識しなければならない。我々は委ねられている真理の保持者である（I テモテ 6:20）。福音が我々に委ねられている（I テサロニケ 2:4）。我々は「キリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです」（I コリント 4:1）。使信を創造したり、選択したりする自由は与えられていない。一つの使信が任せられ、我々の務めはそれを聴衆に宣言し、講解し、また勧めることである。

(b) 講解は誠実さを要求する。

16世紀の宗教改革者は尊敬に値する釈義を取り戻した。彼らは中世の空想的な寓話化から聖書の解釈を救った。聖書の「文字どおり」の意味を重視し「寓話的解釈」と対比させた。彼らは詩的表現や比喩的な意味を無視していたのではない。彼らは説教者が著者の意図としていた意味、テキストの素直な、自然な、明白な意味を求めるべきであると強調したのである。我々は忍耐と、不屈の精神を持って、テキストに取り組みそれと付き合うならば、語るべき使信を発見することができるのである。

宗教改革者はまた「信仰の類推」を強調した。彼らは神の御心によって統一性が聖書に与えられていると信じていた。したがって、聖書は聖書を解釈する、つまり、ある聖句は他の聖句の意味を明らかにするということを承認する。教

会や説教者個人に一つの聖句をもう一つの聖句と矛盾するように解釈する権利は与えられていない。聖書の権威を信じて、宗教改革者は形における多様性を認めながら、聖書の本質的な統一性を主張したのである。現代においても、それは大切な原則である。

(c) 講解は避けるべき落とし穴を明らかにする。

テキストに忠実であることによって、説教者は二つの落とし穴を避けることが出来る。それは迂闊さと不誠実さである。迂闊な説教者は喋っているうちに脱線してしまって、テキストを見失う。不誠実な講解者はテキストに沿っているようで、実際は無理をして歪めた本来の自然の意味から離れてしまう。新約聖書の著者はこのような落とし穴を見抜いて忠告している。偽者の教師は真理の道を踏み外し（Ⅱテモテ 2:18）、神の言葉を売り物にし（Ⅱコリント 2:17）、また、キリストの福音を覆そうとしていると言われ（ガラテヤ 1:7）、鋭くとがめられている。そして、「管理者に要求されるのは忠実であることです」（Ⅰコリント 4:2）と語られている。骨身を惜しまないテキストの講解で、我々がこれらの落とし穴を避けることができる所以である。

(d) 講解は説教する確信を与える。

日曜日の朝に説教壇に立って、誤りを犯しがちな自分や他の人の意見を述べるとしたら、確信を味わうことは難しいであろう。しかし、我々が神のみ言葉を忠実に、誠実に、正直に講解しているなら、大胆に語ることができる。ペトロはこう書いている、「語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい」（Ⅰペトロ 4:11）。

結 び

我々の説教の聖書的、神学的根拠ははっきりしている。神は光である。神は行動をした。神は語った。神は贖罪の行為とその意味を語る言葉を著述として保存されるようにした。この書かれたみ言葉をとおして、神は生きた声で力強く語り続けておられる。教会の健やかさも、成熟も、伝道もみ言葉にかかっているからこそ、教会は注意してみ言葉に聞かなければならない。このみ言葉の

講解のために牧師は召命を受けているのである。我々牧師が誠実にこの任務を果たすとき、神の声が聞かれ、教会は反省し、回復し、活性化し、神に用いられ、神の栄光を表す器に創り変えられる。我々がこのような確信を再確認するとき、キリストの体なる教会の説教壇に大胆に立つことができるであろう。

(Gordon D. Laman)

文 献

- Craddock, Fred B., *Preaching*. Abingdon Press: Nashville, 1989.
- Killinger, John, *Fundamentals of Preaching*. Fortress Press: Philadelphia, 1985.
- Newbigin, Lesslie, *Truth To Tell: The Gospel As Public Truth*. Eerdmans: Grand Rapids, 1991.
- Sleeth, Ronald E., *God's Word and Our Words: Basic Homiletics*. John Knox Press: Atlanta, 1986.
- Stott, John R. W., *Between Two Worlds*. Eerdmans: Grand Rapids, 1982.